

した子どもらは、感謝を忘れないために「極東青年会」を設立し、日ポ友好に尽くしている。

今回の作品では、どの時点までをモチーフにしたのかは分からないが、後半場面ではハレルヤ唱が響き渡る。

日本赤十字のNEWS オンライン版 2020年2月号には“恩返し”と題し、1995年「阪神淡路大震災」

新刊紹介

『迷子の魂』 オルガ・トカルチュク(文)、ヨアンナ・コンセホ(絵)、小椋彩(訳)

岩波書店
2020.11

フィロソフィー本?

私がもし図書館司書なら、大型書店の店員なら、この本は哲学書のカテゴリーに分類するだろう。いや、アート表現のコーナーか。でも思春期のころにこそ触れてほしい。大人のための絵本コーナーも充実しているから、出来れば表紙飾りの棚が相応しいかと、あれこれ悩むだろう。

まずは表紙をご覧ください。インクの滲みボケる題字は時の流れが重なり、背表紙の擦れ具合のデザインも心憎い。

所々には、時の移りを醸し出すような、不用意に紛れこんだ手ちぎりの挟みのメモや、縁が朽ちか

けた古写真の仕掛け。数枚透明シートの読みページと、絵のみの次ページへの透視の時空間。

とびとびのスタンプページの数字が、待つことを伝え、時を急がせない、母なる製作者の慈しみが奥に潜んで早る指を留めさせるのだ。

このご本一冊に、前半はペン先で葉脈一本も略さない具象力の高い俯瞰のモノトーン。後半は次第に増える差し色と懐かしい画剤の香り立つタッチのボリューム。

素朴で漂白しない昔ながらの“帳面”の方眼紙素材は、逆に贅を尽くすアート性を高め、その全ての構成のコンテンツが、魂のあり方にベクトルを向け、ノスタルジーの翳りあるセピア調の熟成で滲み染めている。

まずはその初見で、現代の過剰世界から覚醒しながらの感動をお伝えしたいという衝動があった。

これでようやく本の内部に潜入出来る。筆者は2018年度ノーベル文学賞受賞のポーランド作家オルガ・トカルチュク、絵のヨアンナ・コンセホは出版(2017)の翌年、本書でポーニャ・ラガツィ賞優秀賞を受賞、翻訳の東洋大助教でポーランド・ロ



の被災児童 60人がポーランドに招待されたときの記事が掲載されている。まさに友好ということは手を指し伸ばすことから生まれるということであろう。

(むらた・じょう)

参照(いずれも web から)

- ・「Vol.10 ポーランド孤児救済」日本赤十字社、展示紹介コラム、2011/7/1
- ・「100年前のシベリアからの救出劇! 765人のポーランド孤児と日本人の奇跡の物語」辻明人、日本文化の入口マガジン和楽 web、2020/5/21

シア文学専門の小椋彩(ひかる)さんは、昨年北大での公開講座にて、学識を超えたトカルチュクとの交流もレポートされていたので、嬉しさも増す。

【魂が動くスピードは身体よりもずっと遅いのです。あるところに、忙しすぎて魂をなくしてしまった男がいた。男は医師の助言にしたがい、「迷子の魂」をじっと待つことにする。すると——】

帯にはこう、あらすじが記されていて、私はすぐさまミハエル・エンデの名作「モモ」の時間どろぼうと盗まれた時間を人間に返した不思議な女の子モモを連想したが、本作は淡白なストーリーで他力を登場させない。仮想であるが現実味が色濃い。

アドバイザーは賢い老医師一人。主人公は自分の魂を置き忘れ、自分の名さえ忘れた、一昔前ならモーレツサラリーマンと言われた類いだろうか。現代なら同調時代という個の喪失・埋没の知らぬぶり傍観社会への警告とも受け取れる。

前向き、自分探し、ポジティブ、アイデンティティへの希求は、より過剰な社会の加速で逆に排他を生み出しているのかもしれない。

主人公ヤンはひたすら待つのだ。数ページの沈黙は待つことに注がれている。そして迷子の魂は時を合わせて空洞の主の前に現れる。

待つとは、留まるとは。皮肉なことに、これはコロナウイルス蔓延で余儀なくされた私達自身の暮らしでもある。トカルチュクは予言者でもあったらしい。

自分とは、果てしない旅をしてきた DNA の産物である。この恵みを魂の有り様と重ねれば、もう感謝しかないはずなのに、私達は足りないものをまだ追いかけていた。

そろそろ気づいて良いはずである。

魂と歩調を合わせよう。

自分を訪ね、自分に還る、魂そのものを迎える。

現象に一々反応して焦り、悪者を探すのはよそう。魂は迷子となっても、必ずや主の元に着く。

自分を見失うとはよく言ったものだ。

待てば良いのだ。
まるで、おばあちゃんから受け継いだかのような

装幀に再び五感を震わせる。
ありがとう! トカルチュクさん (熊谷 敬子)

『樺太における日ソ戦争の終結～知取協定』 ニコライ・ヴィシネフスキー(著)、小山内道子(訳)、白木沢旭見(解説)

御茶の水書房
2020.8

隠蔽された停戦協定

樺太の戦前・戦後を多少なりとも知る者として、本書には大きな関心をもって目を通した。

特に、当時樺太ではソ連は敵国でなかったし、ソ連の宣戦布告は驚きをもって見られたことを思い起こす。まず、ソ連軍は日本が無条件降伏を受け入れた後も樺太の各地へ侵攻を続け、さらに8月22日の現地第88師団とソ連軍の停戦協定(知取協定)締結後も、空爆を続けたことは不可解であった。島民の掲げる白旗も赤旗も完全に無視された。

当時、日ソ間には「日ソ中立条約(不可侵条約とも)」が締結されていたが、1946年以降は不延長とする通告はあったものの、基本条約は期限内であるにもかかわらず反故にされた。

本書では、それらについて日ソの見解の相違が明らかになることを期待したが、上記の条約や協定書を反故にした経緯は全く触れられていない。当時のソ連の考え方は日本側には到底受け入れられないが、いかにもソ連=ロシア側のロジックである。

この件に関する日本側の記録としては、停戦協定の責任者であった第88師団の鈴木康生参謀長がその記録を戦後42年目に自著に残している。そこにはこの協定について日ソ間の締結書類が残されていることが克明に記録されている。しかし、この文書は日本側にはあるが、ソ連側の公文書には残されていないことが明らかになっただけだった。つまり知取協定はソ連側に無視されていたのである。

ハーグ陸戦条約などの国際法に照らしても、この協定破りは認められないものだ。停戦協定の存在が解明されれば、樺太も、北方四島もロシアが不法に強奪したことが明らかになり、陸戦条約の精神にも悖るものだろう。

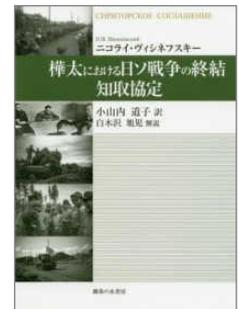
本書の著者、サハリンの郷土史家ニコライ・ヴィシネフスキー氏は日本側の資料をみて、ロシア側の公文書に知取協定は残されていないことを、ロシア人として初めて明らかにした。これは日本側にとって大きな意味があるが、果たして今後ロシア側で検証されるのか、見通しは不透明である。

ロシア政府は現在に至るも「これらの領有は先の大戦の結果だ、その事実を日本は認めよ」と強固に主張しているが、樺太での日ソ戦は、多くは日本

の無条件降伏後であり、また、この知取協定の締結後の一方的な攻撃の結果である。ソ連はこれらの不都合を隠蔽するために終戦は9月2日としているが、詭弁に過ぎないだろう。ソ連は少なくとも連合国側であり同一歩調をとるべきだった。また領土確定のサンフランシスコ条約にも出席しながら調印はしていないのだ。

ロシアが大戦の結果だと胸を張るのであれば、日本はロシアに対して、将来にわたって同じ論法でそっくりお返しできるというワイルドカードを握ったことになる。そういう意味で、本書は日本にとって大きな意義のある一文となろう。

また、二国間条約や協定など何時でも一方的に反故にできるということも教えてくれた。樺太は多くの島民の犠牲の上で本土防衛のための捨て石となったが、ソ連=ロシアという国の本当の姿を教えてくれたことは唯一の収穫であった。



樺太残留ポーランド人の運命

ソ連軍の侵攻の陰で、日本人島民の悲劇ばかり語られることが多いが、苦しんだのは決して日本人島民たちばかりではなく、ロシアや他の国々から残留や亡命していた人々のことも思い起こされる。戦前は、日本の官憲により彼らはひと括りにソ連のスパイと目をつけられたこともあった。

中でもサハリン島時代から「ワルシャワ村」と呼ばれた集落を作り、いつの日か母国へ帰る夢を抱いていたポーランド人たちがいた。彼らは1925年までにスタニスワフ・パテク初代駐日ポーランド特命全権公使から直接母国のパスポートを交付されたのであるが、戦間期から第二次世界大戦期の複雑な情勢から、帰国する機会を失っていた。彼らは日露戦争で日本軍により解放され残留希望を認められたのだが、四十年後に今度はあの悪夢のソ連に解放されるという数奇な運命をたどったのである。

ソ連軍が侵攻してきた時、彼らはソ連軍や民生局の通訳として徴用され、日本人のために働いた者もいた。それは樺太波蘭人会会長のアダム・ムロチコフスキ(ウッチ出身の教育者、北サハリンからの亡

命ポーランド人)だった。彼は、今度は日本人帰国者のための窓口となったのである。彼がソ連側にありながらも決して奢ることなく、明日は我が身として日本人に接していたことは忘れられない。

彼はその役目が終わるとソ連当局によって強制収容所に入れられ、尋問を受けることになった。それは北サハリンから日本へ亡命した経緯や、同胞人の会長となった経緯を調べられたのである。ロシア=ソ連の過酷な取り調べは何時もの常套手段であるが、教養ある彼は数カ月後に解放され同胞たちと共に無事帰国することができたのは幸いだった。(尾形 芳秀)

停戦協定 ロシアの視座から追求

副題の地名をシリトルと読める人は、日本でもよほどのサハリン通である。サハリン生まれのロシア人作家が日本領南樺太で展開された「日ソ戦争(1945年8月9日～23日)」を描いたノンフィクション作品(原題は「シリトル協定」)。著者はソ連・ロシア情報のみならず、関連する日本語文献も駆使して、その全体像をロシアの視座から追求する。類書を欠くわれらにとっては頗(すこぶ)る読みごたえのある著述である。

日ソ両軍代表の鈴木康生大佐とミハイル・V・アリモフ少将は8月22日、全島停戦協定を知取(現

マカーロフ)で締結した。ところが著者によると、ロシア側には同協定に言及した記録が皆無で、自身も白木沢旭児(あさひこ)北大教授の2008年報告(訳書巻末の「白木沢解説」参照)に啓発されたのだそうだ。したがって、「シリトル協定」はヴィシネフスキー提唱の新語である。この新語は果たして、ロシアの学界や言論界で定着するのだろうか。

原書はモスクワの「ペロ」社が17年に上梓した136頁の上質紙冊子、マカーロフ市役所の刊行物(300部発行)である。「序言」には本書がマカーロフ市長の「イニシアチブから始まった」とあり、また訳出されていない原書内表紙の「梗概」では、同市の観光行政に資するとも謳われている。日露両国の相互理解はこのようにして深められるのであろう(「訳者あとがき」参照)。

スターリンは45年、サハリン南部・北海道東部・千島列島を領土とする「アイヌ共和国」を構想したが、「同盟国のアメリカ人によって阻止された」(S・ゴルトノフ「アイヌたち」POLE誌100号、北海道ポーランド文化協会、札幌)。留萌一釧路ラインを境界とするいわゆる北海道分割案のことであろうが、トルーマンはこれを退けたとされる。ひょっとすると赤軍は北海道侵攻を念頭に、知取での停戦協定を急いだのではあるまいか。(井上 絢一)

(北海道新聞 朝刊 2020/10/18 掲載)

『モニカと、ポーランド語の小さな辞書』 足達和子(著)

書肆アルス 2020.6

未だ進行中の「日記」

タイトルから、翻訳という作業を子ども視線から、と予想したが、全然違った(笑)。筆者が留学しており、ポーランド日本語小辞典を編纂する羽目となり、そのときの下宿先で、かつての自分と重なる子ども、モニカとの出会いがあったのだ。

読み始めるとお国柄なのか時代なのか、疑問点が多かった。モニカの父がアメリカへ仕事を探しに出て失踪状態になる。母はその後を追いかける決意をする。ただその際、二歳にも満たない娘を近所の人に預けて出発するのだ。自分の父は国鉄に勤務し、宿舍という町内会のなかで私は小中高と過ごした。しかしここでの近所という繋がりには実感がわかなかった。結局、母親との連絡も途絶え、その近所の人を渡されていたメモに従って、筆者の下宿先である親戚までモニカを連れて来るのだ。どれだけポーランド人ってお人よしなんだろう? というのが初めの印象だ。

さらに社会状況が安定しておらず、子ども服が

売っていない。それで街を歩いている少し大きな子を連れている親子連れに「小さくなった服を譲ってくれ」という交渉をすることにも、はあ? であった。ややしばらくしてポーランドが社会主義国家であったという理解に至るが、基本は「へー」でしかない。が、この二場面をピックアップするなら、社会主義という発想も考え直す価値がある気がしてはきた。

にしても最大の不思議は、いくらモニカが可哀そうな境遇だとして、会って数日にしかならない子を、二十代の独身の留学生でしかない筆者が日本に連れて帰ろうと決意することだ。それで自分の母親

に連絡をとり、ポーランドの最高裁に勤めている同僚に国外への連れ出しが可能かを確かめる行動にでる。なるほど筆者は母子家庭という、実に男性至上主義の悲哀を背負っており、そうした人生観からの動機付けであるわけだ。それでもあまりに弾けた性格の持ち主で、どちらかというところとちよっと呆れる。



ポーランドと社会主義、二十世紀がこれほど変化のある時代であることが克明に書かれている。そして結局モニカを、その親戚が引き取ることで、筆者は一年に一回会いに行く織姫・彦星さまとなるのであるが…。

この作品は、実は未だに進行中の「日記」だと思う。筆者自身が産むことのなかった、しかし事実上の娘であつてもよいと認めたモニカ、幼年時代の記録のない子どもへと手渡すべき「アルバム」であるのだろう。(村田 譲)



ゆかりの旧都ペテルブルクで

初めてのB・ピウスツキ展 井上 紘一

サンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館(クンストカメラ)は、初のB・ピウスツキ企画展「ブロニスワフ・ピウスツキの諸世界～人類学民族学博物館蔵資料から」を開催しました(2019.12.6~2020.3.16; 7.14~27)。

同館はピョートル大帝の命で1714年に創設された「クンストカメラ」(珍品陳列室)に淵源し、2014年には300年祭を挙行了しました。クンストカメラは1836年の科学アカデミー定款により専門別7博物館とピョートル1世室に分割され、民族学博物館は1844年に誕生しました。本館に同居する人類学博物館と民族学博物館は1878年に合併して人類学民族学博物館(以下MAE)を名乗り、帝都創建200周年の1903年以来ピョートル大帝の名を冠しています。ロシア革命後はソ連科学アカデミー民族学研究所として黄金期を迎えたものの、1934年の科学アカデミー本部モスクワ移転以降、同研究所レニングラード支部の地位に甘んじていました。ソ連崩壊後は華麗な歴史を象徴する現称を名実ともに継承しています。MAEとしての歴史は1世紀半足らずですが、今や五大洲の人類文化遺産120万件を収蔵する大博物館、1727年ワシリエフスキー島のネヴァ河畔に建立された本館=上写真=を今も踏襲しています。

MAEのピウスツキ・コレクション

ブロニスワフ・ピウスツキ(1866~1918)は学業期の2年弱(1885.8~1887.5)をペテルブルクで過ごしたので、きっとMAEを訪ねる機会があったでしょう。それはともかく、極東流刑中(1887.8~1905.12)にはMAEの依頼でアイヌとウイльтаの民族資料収集に従事(1902.7~1905.6)、大部分の採集標本をMAEへ納めました。1903年夏にはロシア地理協会が派遣したヴァツワフ・シェロシェフスキの北海道アイヌ調査に参加、その際の収集品もMAEに納入されています。ヴェロニカ・ベリャエヴァ=サチュク(現)MAE上席研究員によると、ピウスツキ(とシェロシェフスキ)が1902~05年に収集したMAE所蔵標本の総数は1,396点、内訳は(若干のウイльта標本も含む)アイヌ標本1,169点、ニヴフ標本79点、その他(シェロシェフスキが満州や中国本土で採集したモンゴル人・中国人資料)148点です[Beliaeva-Sachuk, 158-160 頁]。つまりピウスツキたちはサハリンと北海道で採集した原住民標本1,248点をMAEへ納入、約700点がエンチウ(樺太アイヌ)、300点は北海道アイヌにかかわり、エンチウ資料は世界で最大・最良のコレクションです。

MAEのピウスツキ・コレクションは一部が常設展示されていますが[図録3, 59 頁]=右写真=、まとまっ

た形での出展デビューは1991年、サハリン州郷土博物館がピウスツキ生誕125周年に開催した第2回ピウスツキ国際会議「B・O・ピルスツキーはサハリン諸民族の研究者」の特別展でした。MAEから70点、ウラジヴォストクの沿海地方総合博物館から4点を借用して、館蔵アイヌ標本も併せた96点のピウスツキ収集品を開陳しました[図録1]。次は2013~14年、小樽市総合博物館と九州国立博物館がMAEと組んで、「ロシアが見たアイヌ文化～ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館のコレクションより」と題する「アイヌ工芸品展」を小樽と福岡で開催しました。展示されたMAE蔵アイヌ資料141点(エンチウ85、北海道アイヌ42、千島アイヌ14)のうち104点はピウスツキらの収集品(エンチウ74、北海道アイヌ30)でした[図録2]。私たちはピウスツキが自ら採集したアイヌ標本の実物を、日本で初めて瞥見する機会に恵まれました。



MAEにおけるピウスツキ企画展

今回のピウスツキ企画展は通算3回目ですが、ペテルブルクのMAEでの開催は、1世紀超の収蔵期間で初めての快挙です。企画展の開幕には、クンストカメラの305回誕生日に当たる12月6日がわざわざ選